

# 大学図書館の研究支援機能の充実 アメリカ合衆国の場合、日本の場合

本特集は、2005年10月15日（土）に和光大学総合文化研究所と和光大学附属梅根記念図書館の共催によって開催されたシンポジウム「大学図書館の研究機能の充実 アメリカ合衆国の場合、日本の場合」の記録である。当日のプログラムは以下のとおりである。

開会の挨拶 コーディネーター・司会

岩間暁子（和光大学人間関係学部助教授）

講演 「バージニア大学における図書館サービスの充実方策」

岩淵祥子（バージニア大学エレクトロニック・テキスト・センター  
日本語テキスト・イニシアティブ・コーディネーター）

コメント

- 「和光大学附属梅根記念図書館の現状」  
沢里冬子（和光大学附属梅根記念図書館事務長）
- 「図書館利用者としての研究者の立場から」  
長尾洋子（和光大学表現学部専任講師）
- 「日本の大学図書館の研究支援機能」  
津野海太郎（和光大学附属梅根記念図書館長・表現学部教授）

フリーディスカッション

閉会の挨拶 ユ・ヒョジョン（和光大学総合文化研究所長）

懇談会

本特集のうち、岩淵祥子氏による講演は当日フロアから出された疑問に対する回答も含める形で寄稿していただいた原稿を掲載した<sup>(1)</sup>。3名のコメントーターからのコメントについては、基本的に当日の発言をそのまま掲載した。

(1) 内容にあわせて論文のタイトルは変更されている。

# コーディネーター・司会から

岩間暁子 所員・人間関係学部助教授

## シンポジウム開催の経緯と意義

コーディネーター兼司会としてシンポジウムの企画・開催にかかわった立場から、(当日の挨拶でも述べた)シンポジウムを開催するに至った経緯とその意義についてこの機会に改めて説明させていただきたい。

私自身は、大学に所属する研究者が一定の水準の研究成果を発表していくためには、大学が研究資源の蓄積(研究資源の有効活用を可能とするため、専門性を有する職員の採用と養成を含む)および研究成果の発表を組織的に支援していく必要があることを痛感している1人である。このような考えを強く持つようになったきっかけとして、私事で恐縮だが、2004年度の在外研究の際に韓国とアメリカの大学で研究支援の一端に触れた経験が大きい。

2004年4月から7月までの4ヶ月をソウルにある聖公会大学校社会文化研究院の客員助教授として、8月から2005年3月までの8ヶ月をアメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校社会学部の客員研究員として研究活動をおこなった。聖公会大学校は学生数3,000人弱の小規模大学であるが、大学が研究活動を積極的に支援していることが印象的だった。学外の研究資金獲得を目指して学内の教員のみならず、学外の研究者も積極的にプロジェクトに位置づけるとともに、研究活動の支援にあたる専門の事務職員1名をおき(大学院の修士課程修了)、補助的な事務を担うために大学院生数名をアルバイトで雇用するしくみも導入している。

場所を移してアメリカでは、(岩淵氏の講演で触れられた)いわゆる「研究図書館(research library)」を利用して効率的な資料収集ができた。複数の豊富なデータベースのみならず、サービスの充実度や図書館司書の専門性の高さには圧倒された。たとえば、現代社会を対象に社会学的研究をしている筆者の場合、複数のデータベースを活用すれば雑誌論文の8割以上はその場で入手できた(PDFファイルによるダウンロードまたはメールでの送信、その場での印刷といった複数の方式が選択できる)。また、学外からも24時間データベースにアクセスできるため、長尾氏がコメントで触れた「まだ固



まっていないアイデア」や「断片的な情報」をつなげて自分のアイデアを固めていくにあたって、先行研究でどこまで形にされているのかを確認しながら構想を練っていける環境が保障されていた。さらに、他大学の図書館への貸出し依頼や雑誌論文の文献複写、借り出している本のタイトルや返却期限の確認といったことのほとんどがオンラインでできるため（しかもマウスのワンクリックですむ）、和光大学の図書館の現状と比較して、研究者の研究効率は比べものにならないくらい高いと感じた。

このような研究環境の違いを帰国後、ユ研究所長にお伝えしたところ、研究そのものを支援する大学の体制や、研究成果を発信するバックアップ体制といったものが研究活動の充実にあたって重要だろうという指摘を受けた。折しも、研究所は設立10周年を迎える中、この10年の歩みを振り返る自己点検作業を進めており、研究所の活性化のためにも大学総体としての研究支援機能の向上が不可欠であることを痛感されているという。また、大学における研究活動の活性化のためには研究所に加えて、図書館の研究支援機能の充実に欠かせないだろうというご意見もあわせてうかがった。

他方、図書館は2003年10月の津野館長就任以来、図書館のサービス向上に努めており、この2年間で学生の学習支援サービスについては当初の目的をほぼ達成し、今後は教員の研究支援サービスの向上に向けて具体的に着手したい意向を持っていることがわかった。

このような研究所サイドと図書館サイドのそれぞれが持っている問題意識を基盤としながら、バージニア大学で図書館職員として電子資料の収集業務に携わっている岩淵氏を紹介できる立場にある岩間、研究所の実務を担う内田助手、図書館の事務の責任者である沢里氏で話し合い、今回のシンポジウ

ムの企画を具体的に進めてきた。

今回のシンポジウムには2つの意義があると考えられる。1つは、シンポジウムの参加者は広く大学図書館の研究支援機能の充実に関心を持つ方々であり、アメリカの大学における研究支援の実例を参考にしながら、日本の大学図書館におけるよりよい研究支援のあり方を目指してお互いに知恵を絞っていく機会としての意義である。

もう1つは、「内向き」とも言えるが、和光大学の脆弱な研究支援機能の現実を直視し、問題点を共有した上で、よりよい研究支援環境の構築に向けてそれぞれの立場で努力していくための出発点にする、という意義である。今回の企画が具体化した後、近隣の大学も含め、日本の大学における図書館の研究支援機能について具体的に調べたところ、多くの大学でこの数年の間に急速にデータベースが導入され、オンライン上での文献複写依頼や購入希望図書の依頼、借り出している本のタイトルや返却期限などの確認といったことが既に可能になっていることがわかった（和光大学より小規模の大学でもこのような研究支援サービスが提供されている）。他大学でできたことがなぜ和光大学ではできなかったのか。少なくとも他大学と同程度の研究支援環境の構築をスピード感をもっておこなっていくためには、図書館のみならず、大学の他の部署や理事会などがこのような現実をまず直視する必要がある。研究支援に関する他大学の動向を把握する姿勢、学内の他の部署との有機的な連携、専門性をもった職員の採用並びに採用した職員のスキルアップを促すしくみの導入、柔軟な予算編成など、大学全体として早急に改善を急がなければいけない課題は多い。当然のことながら、このような脆弱な研究環境にとどまる状況には、大学の運営を担う教員側の研究に対する姿勢や問題意識の乏しさも深く関わっていることを自戒を込めて指摘しておきたい。このような問題を抱えているからこそ、今回のシンポジウムのように、大学のあり方の根本に関わる課題について教員と職員が一堂に会して一緒に考える機会は貴重である<sup>(2)</sup>。

(2) 会場いっぱい参加者のほとんどは学外からの参加者だった。開催に先立って、研究所や図書館が今回のシンポジウムへの参加を教職員に広く呼びかけたにもかかわらず、残念ながら、研究所や図書館以外の他部署の職員や教員の参加はごくわずかにとどまった。同様の状況は2005年7月9日に開催された研究所主催のシンポジウム「大学における研究活動は、いま 大学付属研究所の現状と未来」でも見られたという。このような研究拠点としての職場のあり方に対する教員側の「無関心」(その一部は低い研究意欲に由来していると思われる)と事務組織の研究支援構築に関する「無関心」は表裏一体であり、和光大学が直面している危機の1つである。

## 各コメントの概要とディスカッション

岩淵氏からは、バージニア大学を例にとりながらアメリカの大学図書館における研究支援の現状について、(1)研究資源の充実の重要性、(2)専門性の高い図書館職員の養成という2点を中心に、データベースなどのデモンストレーションも含めて貴重な講演をいただいた。講演を踏まえてコメントーターの3者からそれぞれの立場に基づき、次のようなコメントが寄せられた。

沢里氏は和光大学の図書館が教育・学習をサポートする視点から、学生の学習支援サービスの充実に力を注いできた経緯を紹介した後、図書館としての研究支援についてはこれから着手する段階であるという認識を示した。現状に関するこのような率直な問題認識の上に、教員のニーズに応えるためにも、ILLサービスの導入、文献複写料金の無料化という近年の取り組みに加えて、今後は研究所や情報センターなど他の部署との連携、データベースや電子ジャーナルの導入、図書館職員の力量の向上という具体的な課題が提示された。

長尾氏からは、国内外の大学図書館の利用経験を踏まえつつ、岩淵氏の講演の中で触れられた豊富な研究資源の確保の必要性、そしてそれを担う図書館司書の専門性の向上の重要性という2つのポイントに沿って、研究者のニーズが示された。まず、研究資源の必要性に関わっては、研究者がアイデアを練っていく段階ではデータベースの充実といった探す手段の充実は不可欠であり、さらに、欲しい資料が迅速に閲覧・入手できるという条件も非常に重要であると指摘した。次いで、図書館職員の専門性には、最近の電子化の動向を反映してデータベースの増強、データベース利用のためのツールの開発、有効なリンクの紹介を担える力量といったことが含まれるだろうという意見が述べられた。さらに、アメリカの大学図書館においては貴重書が図書館の価値を高めるための重要な位置を占めていることに関わって、和光大学の文脈では朝鮮資料や中国関係の資料などをきちんと整理し、その資料的意義を他大学や他の研究機関のコレクションと比較してピアールしていくための具体的な方策（各言語を理解し、その学術的価値を理解し他者に伝えられる人材の確保など）の必要性も指摘した。

津野氏は公立図書館も含めた日本の図書館や図書館職員をとりまく環境の厳しさについて言及しながら、大学図書館の研究支援の基本的条件としてデータベースや電子ジャーナルの導入が急がれる一方、それらが（外的な）技術の開発やビジネスの利潤というものに取り込まれずにすむための努力が

必要であり、そのためには知的共同体としての大学、その中の中心の1つとして図書館が位置づく仕組みづくりが求められているだろうと指摘した。和光大学の文脈に即しては、地域性をいかしつつ他の機関とのネットワーク作りをおこなう一方、小さな大学における図書館のあり方、そして研究支援機関のあり方について1つのモデルづくりを目指していきたいという抱負が述べられた。

3者からのコメントの後、フロアからは「アメリカの大学図書館ではどのように選書をおこなっているのか」「アメリカの大学図書館では教員と職員がどのように共同作業をおこなっているのか」「優秀な図書館職員の採用と再教育にあたってどのような工夫がなされているのか」「紙媒体とデジタル媒体をどのように組み合わせて資料を収集していったらよいのか」「授業で使う資料のスキャン・サービスの提供にあたってアメリカの大学では著作権の問題をどのように解決しているのか」「研究者にとって有用なデータベースとはどのようなものか」「日本の大学ではいわゆる「生き残り」が叫ばれ、教員が忙しくなる一方で、どのように教員は研究時間の確保に努めているのか」などの質問が出され、講演者の岩淵氏、3名のコメンテーター、司会も交えて活発な議論が展開された。3時間半を超えるシンポジウムにもかかわらず最後まで熱心に耳を傾け、活発な議論を展開して頂いた参加者の皆さんに改めて感謝申し上げます。同時に、小規模大学の事例も盛り込みながらアメリカの大学図書館における研究支援の実態について貴重な講演をいただいた岩淵氏、ならびに、お忙しい中、コメンテーターをお引き受け頂き、それぞれの立場から率直なコメントをいただいた沢里氏、長尾氏、津野氏にもコーディネータとして感謝申し上げます。

(いわま あきこ)

# アメリカにおける大学付属図書館の研究支援機能 バージニア大学を例に

岩淵祥子 バージニア大学オルダーマン図書館

## 1 「研究大学」(research university) の説明と図書館の役割について

「研究大学」という言葉は、日本ではあまり馴染みがない言葉と思われる。この「研究大学」という概念は、講演を深く理解していただく上で不可欠だと思われるので、簡単にその歴史と内容について説明する。

アメリカにはおよそ3,600校の大学があると言われるが、研究大学と認められているものはわずか60校にしかすぎない。研究大学かどうかは、アメリカ大学協会 (Association of American Universities) が行っている<sup>(1)</sup>。この協会が設立され、高等教育がアメリカで推進されるようになったのは、南北戦争ののち、とくに1890年代にアメリカで高等教育改革が大きな転機を迎え、それまでの学部段階での教育だけでなく、大学院を設置し、研究 (リサーチ) を推進しようという動きが出てきたことに起因する。この高等教育改革は、『富の福音』で知られる鉄鋼王アンドリュー・カーネギーのような慈善事業家からの私財が、カーネギー財団のような教育の分野に用いられることで可能となった<sup>(2)</sup>。高等教育をヨーロッパに依存するというそれまでの姿勢から、アメリカ国内で Ph. D. (博士号) を養成しよう、また、旧来の知識伝授型の教育だけでなく、新しい発見のための研究を進めようとして大学院大学形成が進んでいったのである。

こうした状況の中、1900年、アメリカ大学協会が作られた。その目的は次のように述べられている。「本協会は、協会員に次の2つの方法で奉仕する。1つは、アカデミックなリサーチと大学院・プロフェッショナルスクール教育に関係する問題について国レベルでの政策形成を補助する。もう1つは、大学学部教育に関するさまざまな問題を討議する場を付与することである。」このアメリカ大学協会は、博士号を付与する14の大学が1900年に作ったもの

(1) <http://www.aau.edu/aau/aboutaau.cfm>. [Accessed October 20, 2005].

(2) <http://www.carnegiefoundation.org/aboutus/philanthropies.htm>. また、カーネギー財団がアメリカ高等教育に果たした役割については、Ellen Condliffe Lagemann, *Private Power for the Public Good: A History of the Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching* (Middletown, Conn.: Wesley University Press, 1983) を参照。

で、現在、北米の60の大学から構成されている。協会設立当初からのメンバー14校には、ハーバード大学、コロンビア大学、コーネル大学といった、いわゆるアイビー・リーグとして知られる大学が含まれている。バージニア大学が協会に参加を認められたのは1904年である。

アメリカ大学協会をご紹介したのは、次のような理由による。まず、州立と私立合わせて3,600校あるうち、わずか60校が「研究大学」として認められているという点であり、次に、この60校の中に本日一例として紹介するバージニア大学も含まれているということである。また、協会のメンバーとなるには、協会からの加入要求が必要ということで、自薦ではないということも付け加えておきたい。

アメリカ大学協会は研究大学の連合だが、研究を支援する図書館が集まって作られているのが、American Research Libraries (略して ARL)、アメリカ研究図書館協議会である<sup>(3)</sup>。アメリカ大学協会には60校が参加しているが、ARLには123の図書館がメンバーとして認められている。研究図書館といっても、必ずしもリサーチを行う大学の図書館ばかりでなく、アメリカ議会図書館のような図書館も研究図書館協議会のメンバーに加わっているため、図書館協議会参加数のほうが大学協会よりも多くなっている。

この研究図書館協議会はいくつかの小委員会からなり、それぞれの委員会は、例えば学术交流(知的意見の交流)をどのように推進することができるかを討議したり、研究と教育と学習における図書館の役割を話し合うなどしている。また、合衆国政府が発行する資料 統計や白書などを、どのようにデジタル化し、利用可能としてゆくかを議論するなどして、データが研究に用いられる方法を模索している。こうした小委員会の名前が示すように、研究と教育を支えることを使命とする図書館が、教育と研究の現場における問題を把握し、その解決を研究機関とともに目指している。アメリカでは、こうした大学連合や研究図書館協議会といった、同業者の組合とでもいったものが、互いに意見を交換し、ともに障害を克服してゆくという姿勢が強いといえよう。

## 2 バージニア大学

次に、バージニア大学について簡単に説明しよう<sup>(4)</sup>。

(3) <http://www.arl.org/>. [Accessed October 20, 2005].

(4) <http://www.virginia.edu/>. [Accessed October 20, 2005].

バージニア大学は州立大学である。州立大学とは私立大学と対極にある日本の国公立大学をイメージしていただいて構わないのであるが、日本の旧国立大学の研究費が文科省からの予算にほぼ依存しているのに対して、バージニア大学の場合、州議会から大学運営に当てられる予算は大学の予算総額のわずか10パーセントしかすぎない<sup>(5)</sup>。また、ここで留意していただきたいのは、アメリカは連邦制をとっており、州によって法律も違えば教育政策も異なるということである。したがって、ここでの話は、州立大学、それもバージニアの場合という限定がつくことをご理解いただきたい。

バージニア大学は、1819年の創立で、創立当初から当時としては珍しい「パブリック（州立）」な大学であった。アメリカでもっとも古い大学はハーバード大学であるが、ハーバードやイエールといった大学は私立であり、植民地時代から法曹や医師や神学者（牧師）の育成を目的としていた。バージニア大学の創設にあたっては、トマス・ジェファソンが尽力した。ジェファソンはアメリカ独立宣言起草者として、また、合衆国第3代大統領として知られている。彼は、バージニア大学の建物の設計からカリキュラムの作成まで指揮監督を行い、教会が大学の中心にあるのが常識だった時代にあって、バージニア大学では図書館が大学の中央、つまり、キャンパスの中心に位置しなければならないと考え、そのような設計を行ったという<sup>(6)</sup>。

歴史はこのぐらにして、次にバージニア大学に関わる統計を紹介することにする。学生数について見るならば、学部生が約13,000名、大学院生約6,300名で、彼らの教育にあたる教員数は約2,000名という、アメリカの中でも大きな大学である<sup>(7)</sup>。ここから先は、このバージニア大学の教育と研究を支える図書館の役割について説明する。

### 3 バージニア大学図書館について

#### (1) 構成

バージニア大学図書館は、17の分館を持ち、図書490万冊、雑誌6万タイトルを所蔵している<sup>(8)</sup>。

(5) <http://www.virginia.edu/restructuring/appendixA.html>. [Accessed October 20, 2005].

(6) Jennings L. Wagoner, *Jefferson and Education* (Charlottesville, VA: Thomas Jefferson Foundation, 2004); Cameron Addis, *Jefferson's Vision for Education, 1760-1845* (New York: Peter Lang, 2003) 参照。

(7) <http://www.virginia.edu/stats&facts/>. [Accessed October 20, 2005].

(8) <http://www.lib.virginia.edu/facts.html>. [Accessed October 20, 2005].

## (2) 職員数

職員数は、フルタイムが226名、学期中にアルバイトで働く学生は300名、夏休みと冬休み時期の学生アルバイトの数はおよそ100名である。アルバイトの学生が行う仕事は、図書の貸し出しから配架、購入図書のデータ登録、図書館が行う電子テキスト化プロジェクトのデータ作成と多様である。しかし、学生アルバイトが図書館のサービスに最も貢献しているのは、夜間勤務による開館時間の長時間化だといえる。また、最近の傾向として、図書館職員の中にコンピュータプログラマーといった、技術系技師の占める割合が高まってきていることも付け加えておきたい。大学全般のIT (Information Technology の略) 部署もあるが、書誌情報や図書館のホームページ、図書館情報のセキュリティの維持には、こうした新しいタイプの図書館職員がこれからはますます必要になってゆくと思われる。さらに、図書館が提供するサービスの多くにテクノロジーを積極的に取り込んで行くことも必要不可欠になっており、この傾向は今後もますます強まってゆくのではないかと思われる。

## (3) 予算

次に、図書館の予算をみてみよう。2003年度の人件費、図書費、運営費のすべてを合わせた支出は、2,171万ドル、うち図書費は全体の約3割にあたる660万ドルで、1ドル112円で計算するとおよそ7億4千万円となる。コンピュータとデジタル化の普及にともない、冊子体から電子ジャーナル購読へと移行してきたが、この電子ジャーナル購読料も図書費の中に含まれている。後ほど触れることになるが、電子ジャーナル、とくに科学系ジャーナルは購読料が非常に高いにもかかわらず、「電子版」ということで物理的な「物」としては図書館の書庫に財産として残らない。これは、一方で書庫の場所確保の問題を解決するが、他方で図書館の優秀さをはかる際の目安となる蔵書数に影響を及ぼしかねない。また、いくつかの業者は、1つの雑誌だけでなく、いくつかの雑誌をまとめて購読することを図書館に求めることがあり、複数の雑誌購読を必要としない小規模の大学にとっては、逆にこれまでより多額の出費につながることもありうるという。そうした問題に対処するため、バージニア州にあるいくつかの大学がコンソーシアムを作り、この大学連合が業者と契約を結び、コンソーシアム加入大学がその利用の量に応じて購読料を分担するという方法も採用している。こうした共同購読は、学術雑誌に限らず、データベースの利用にも普及しつつあるように見受けられる。

ここまでバージニア大学図書館の蔵書数、職員数、予算などについて説明してきたが、和光大学図書館がこれからのサービス充実を行う際に比較しやすいように、バージニア大学よりも小規模な大学であるクラーク大学を紹介し、クラーク大学がどのようなサービスを行っているか見ることにする。

クラーク大学は、学部生2,000名、院生750名、教員数169名のマサチューセッツ州にある私立の大学である<sup>(9)</sup>。このクラーク大学図書館の図書館のサイトをみると、電子テキストと電子ジャーナルへのリンクのほか、データベースへのリンクもあることがわかる<sup>(10)</sup>。まず電子テキストと電子ジャーナルだが、クラーク大学関係者のみ利用可能なものにはCUという赤い文字がつけられている。ここで興味深いのは、無料で利用できる他大学の電子テキストサイトをリストにあげているということである。これは、司書が情報収集能力を発揮している例だと言える。さらに、司書が情報収集能力だけでなく、膨大な電子テキストサイトの中から、研究に利用価値のあるものを選びうるだけの能力を有していることだとも言えるであろう。

#### (4) バージニア大学図書館が提供するサービス

バージニア大学図書館は、自らのゴールを次のように定めている。「バージニア大学図書館は、リサーチと教育を次の2つの方法によって促進しようとするものである。1つには、卓越したコレクションを構築し、コレクションと情報とサービスへのアクセスを容易にすることであり、もう1つは、意見が尊重される環境の中で、リサーチと学習と対話が行われる物理的場を提供することである」<sup>(11)</sup>。この目標を達成するため、バージニア大学図書館がどのようなサービスを提供しているか、具体的に紹介してみたい。

図書館が提供するサービスは、次のようなものである(図1参照)<sup>(12)</sup>。

この中から、研究支援に関わるサービスにしぼって、2つほど紹介したい。

大学教員向けサービスの中で、もっとも教員からの評価が高いのは、LEO、Library Express On-Grounds(略してリオ)で、オン・ラインのカタログに希望の図書が見つかった場合、図書館が教員の研究室まで本を届けるというサービスである。この所蔵図書の配達サービスは、アメリカの他の大学でも行っていると聞くと、バージニア大学図書館以外、このサービスを無料で行

(9) <http://www.clarku.edu/>. [Accessed October 20, 2005].

(10) <http://www.clarku.edu/offices/library/>. [Accessed October 20, 2005].

(11) <http://www.lib.virginia.edu/HR/policy/vision.html>. [Accessed October 20, 2005].

(12) <http://www.lib.virginia.edu/services.html>. [Accessed October 20, 2005].

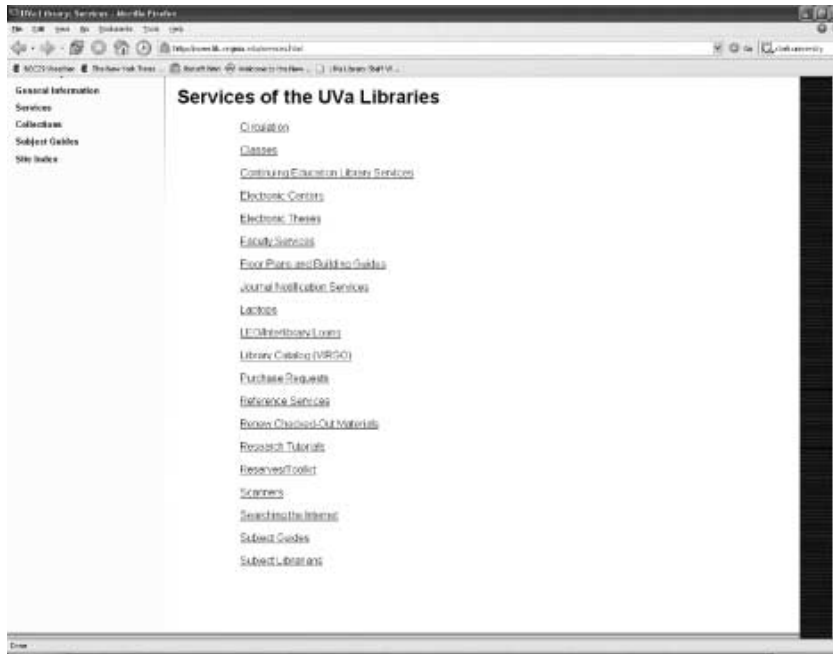


図1 バージニア大学図書館が提供するサービス

っている図書館はあまり耳にしたことがない。このサービスは、相互利用貸借を行う部署が担当し、1日1度、注文があった学部まで学内便で配達している。バージニア大学に所蔵されている図書の配達だけでなく、論文の複写配達も行っている。

次に、Instructional Scanning Services であるが、教員は授業で学生に論文を読んでもらうとすると、かつては人数分複写を用意しなければならなかった。しかし、このインストラクショナル・スキャンニング・サービスを利用すると、教員は論文を入手し、その論文を図書館に持ち込めば、図書館がそれをPDFのフォーマットにして、パスワードで守られたクラスを受講している学生だけにアクセス可能な場所（通常はサーバー）に保存するというものである。このサービスは、教員の研究を直接的に支援するものとはいえないが、教員の教育負担軽減に貢献し、ひいてはその軽減分の時間を研究時間に割くことに貢献しているものと思われる。

See Library Hours For:  
 Fall Semester  
 August 24 - December 5, 2005

Library	Mon - Thu	Friday	Saturday	Sunday
Alderman	8am-12mid	8am-5pm	9am-5pm	10am-12mid
Astronomy	Key access only (Contact the Brown Science & Engineering Library)			
Biology/Psychology	See: <a href="http://www.lib.virginia.edu/ehour/biopsych_library_fall_semester_2005.html">http://www.lib.virginia.edu/ehour/biopsych_library_fall_semester_2005.html</a>			
Brown Science & Engineering	8am-2am	8am-5pm	10am-6pm	10am-2am
Chemistry	Closed for renovations (Contact the Brown Science & Engineering Library)			
Clemson	Open 24 hours	Close at 12mid	9am-12mid	Open at 10am
Garden School Library	See: <a href="http://www.darden.virginia.edu/bschool/info.htm">http://www.darden.virginia.edu/bschool/info.htm</a>			
Education	8am-11pm	8am-5pm	10am-6pm	1pm-11pm
Fine Arts	8am-12mid	8am-5pm	10am-6pm	1pm-12mid
Harrison Institute	9am-5pm	9am-5pm	9am-5pm	Closed
Health Sciences Library	See: <a href="http://www.health.virginia.edu/libraries/hslib/hslibopenhours.cfm">http://www.health.virginia.edu/libraries/hslib/hslibopenhours.cfm</a>			

図2 バージニア大学内各図書館の開館時間

## 4 日米の研究図書館の相違点

### (1) サービスの質と量

日本とアメリカの大学図書館の違いの中でもっとも顕著なものは、おそらく図書館の開館時間の長さであろう。バージニア大学の場合、17館ある図書館により開館時間がまちまちであるが、大学院生向けの図書館であるオルダーマン図書館を例にとると、月曜から木曜は朝8時から深夜0時まで、金曜日は朝8時から夜9時まで、土曜日は朝9時から夜8時まで、日曜日は朝11時から深夜0時までとなっている。

すべての図書館の開館時間は図2のようになる。

このような長時間、とくに夜間に図書館を開館できるのは、学生アルバイトの活用によるところが大きい。夜間図書館で働く学生アルバイトの仕事の内容は、書庫への本の返却、本の貸し出し、マイクロフィルムの貸し出し、また、機械の使い方の説明など多種多様である。夜間には学生がレファレンスを担当する。夜間にレファレンスを担当する学生は大学院生で、彼らにはレファレンス担当司書が特別の訓練を施している。とはいえ、彼ら大学院生

のレファレンスが答えに窮する質問があった場合には、翌日、正規の司書が勤務する時間に来館してもらうか、あるいは、電子メールで質問を図書館に送ってもらうよう連絡することになっている。

先に、図書館のサービスにコンピュータの導入が進んでいると述べたが、レファレンスもその例にもれない。バージニア大学ではレファレンスのサービスを受ける方法として4種類提供している<sup>(13)</sup>。1つは、開館時間に直接司書に質問するというもの。2つ目は、図書館のホームページにあるオン・ラインのフォームに質問を記入して回答を待つというもの。3つ目はインスタント・メッセージ（チャット）を使って、レファレンス担当者に質問をするというもの。4つ目は、レファレンス係に予約をとって相談にもってもらうというものである。ここでのポイントは、利用者のニーズに合わせて、いくつかのレファレンス・サービスへのアクセス方法を提供しているということである。大学院生や教員の場合、必ずしも毎日大学へ足を運ばない。そうになると、レファレンスに関する質問をオン・ラインの用紙に記入して回答を待つというのが、時間の使い方としてはかなり有効だということになる。ここでは、こうしたコンピュータを使ったサービスも行われているということを紹介しておきたい。

また、図書館のサービス全般にいえることだが、アメリカの図書館はコンピュータを用いたオン・ラインでの情報のやり取りがかなり進んでいるといえる。一例をあげるならば、論文の複写依頼もオン・ラインのフォームで行うことができる。教員が申込み用紙に雑誌のタイトルやページ数を記入し、複写を依頼するというのではなく、雑誌記事、論文検索結果画面から情報を複写依頼フォームに写すことができるのである。これは、図書のタイトルや雑誌名の誤記、複写依頼用紙の紛失を防ぐことに役立つ。また、バージニア大学図書館が購読している電子ジャーナルの多くが、論文や要約を印刷、あるいは、電子化テキストとして保存、あるいは電子メールに転送するというオプションを備えている。無論、これはデータベースや電子ジャーナルを販売する業者との話し合いの結果、こうしたサービスが可能になったわけであり、図書館と図書館のIT部署が工夫をこらした結果であるとはいえない。しかし、利用者がデータベースや電子ジャーナルからどのような情報をどのような形で得ようとしているかを把握し、利用者のニーズを満たすため業者と話し合いを図書館が行った結果、こうした便利なサービスが実現可能とな

(13) <http://www.lib.virginia.edu/questions.html>. [Accessed October 20, 2005].

ったといえる。

具体的な例を紹介しよう。学術雑誌に、*The Journal of American History* というものがある。これをバージニア大学のオン・ライン目録で検索してみる。詳しい書誌情報をみると、図書館は電子版と通常の印刷体の2つを購読していることがわかる。電子版を収める JSTOR というデータベースには、1964年から99年までの論文が収められていることもわかる。この JSTOR のリンクをクリックすることで、利用者は JSTOR のページに行くことができ、そこで必要な論文を検索、ダウンロード、あるいは印刷することができる。

最後に、司書の質というか、司書がもつ図書館学以外の知識の量に違いがあるかと思われる。偶然だが、先に比較の例としてあげたクラーク大学が、現在科学分野の司書を募集しているので、参考までに募集記事をここに引いてみることにする<sup>(14)</sup>。このポジションに求められる要件として、「図書館学修士号は必須、それに科学の知識と図書館勤務経験のあることが望ましく、対人関係とコミュニケーション、それに仕事を片付ける能力(が必要)」。最後の対人関係だが、これは図書館司書として個人としては優秀であっても、図書館全体の組織の中で同僚や他の部署と連携を保ちつつ仕事ができる人間でなければならない。そして、サイエンス・ライブラリアンとして、教員や学生とのコミュニケーションがうまくできなければならないという理由から付け加えられたものであろう。自分の大学の教員が現在どのような研究をしているのかを知らなければ、購入する雑誌や図書の選択に迷うことになる。また、学生のレポートを助けるには、学生の質問を受け、やりとりの中から学生に必要な情報源と問題へのアプローチの仕方を示さなければならない。知識があるだけでなく、アメリカの図書館ではこうした面も採用時には考慮されている。

これまでの話だと、アメリカの司書に採用される場合、学士号以上の学位が要件とされている、アメリカの司書は大変優秀だということになるが、採

(14) 原文は次の通り。"We seek an energetic, progressive librarian with initiative to oversee and develop 21st-century science collections and services. Must have understanding of evolving online publishing and scholarly environment in the sciences and the ability to work effectively and collaboratively with science faculty. Responsibilities include management of online/print collections, faculty liaison, public/reference services, instruction, student supervision and other duties as assigned. MLS degree required; science background and library experience preferred. Strong interpersonal, communication and organizational skills needed. Starting salary expected to be mid-to high \$30's depending on experience, with excellent benefits including health insurance, retirement plan, family tuition benefits, generous vacation leave and many more." The Chronicle of Higher Education [<http://chronicle.com>] の公募欄より。[Accessed October 20, 2005].

用されてからも図書館は司書の再教育を行っている。レファレンスの司書に話を聞くと、最近は電子ジャーナルの数も膨大で、それらすべてに1人の司書が通じるということはほぼ不可能である。また、人文系のバックグラウンドを持つ司書が社会科学系の質問を受けた場合、必ずしも社会科学系司書と同等の知識で質問に回答できないことがある。そこでそうした場合に備え、レファレンスの司書同士が互いに受け取った質問を勉強し合い、互いの長所、短所を補い合っている。また、バージニア大学図書館は、マイクロソフト社のワードやエクセルなどのプログラムや、初歩的ウェブページの作り方のクラスなどを職員向けに開いている。また、学内外の講習会への参加を奨励し、職員の向上意識を育てる努力をしている。バージニア大学図書館内での評価制度は、前年度作成した勤務計画をもとにどのぐらい計画が達成されたかをもとに評定される。勤務だけでなく、上司は部下がクラスを受講し、採用後も新しい技術を取得するなどした場合、高い評価を下す。こうした勤務評価によって、職員は採用後も絶え間なく自己向上を目指すようになっている。

## (2) 図書館の自己点検

今回の講演にあたり、図書館長に図書館の目標についてインタビューを行った。今日の報告の最初にも出てきたように、館長が繰り返し強調するのは、大学が行う「研究と教育のサポート」ということである。図書館は大学の一部であり、大学が研究と教育の場であるからには、図書館がそれをサポートするというのはあまりにも当然のことかも知れない。しかし、それではどのようにサポートすればよいのか。また、サポートするだけでなく、新しいテクノロジーが日々利用可能になるなか、どのように教員や学生のニーズと図書館の使い易さを結び付けて行くかを考え、実行にうつしていかなければならない。

こうした利用者のニーズを把握するために、図書館が1993年からほぼ4年ごとに行っている利用者向アンケートとその結果を紹介する<sup>(15)</sup>。

アンケートは、利用者の満足度を高めるには利用者が図書館になにを求めているかを把握しなければならないという認識からスタートしたという。つまり、単に本や情報を預かるものとしてではなく、教員や学生により効率的に本や情報を利用してもらうために、図書館が積極的に利用者のニーズ把握

(15) 4年毎に実施している理由をアンケート集計担当部局のジム・セルフ(Jim Self)に尋ねたところ、毎年行くと回答者が疲弊する、なかでも、教員からの回収率が下がるということと、集計に時間がかかるためということであった。

表1 教員と学生の図書館への要望の比較

	教員 (2004)	大学院生	学部生
図書	61%	55%	38%
電子ジャーナル	49%	58%	16%
相互利用	35%	10%	2%
オン・ラインで利用可能なレファレンス (サイト)の充実	31%	29%	9%
冊子体の雑誌購入	27%	16%	6%
ビデオ・DVD	6%	9%	26%
開館時間の延長	4%	8%	21%
館内の快適さ	3%	19%	37%
ワークステーションの増設	1%	9%	31%

(注：教員以外は、2005年度の集計結果)

に努めているわけである。アンケートは、図書館を訪れた利用者に対して行い、聞き取った身分をもとに教員、大学院生、学部生にわけて結果をまとめている。アンケートの結果から(表1) 教員と大学院生、学生で図書館に対する要望が異なることがわかった。学部生は、図書館をおもに「学習の場」として利用するため、図書館の環境、つまり快適さを求めている。これに対して、教員と大学院生はデータベースの充実を図書館に期待している。

来館者のアンケートのほか、図書館への「ご意見番」として、学長が指名する20名の教員からなる図書委員会なるものがある。これは、研究と教育に図書館がどうあるべきか、教員の立場から図書館に提案をする機会となっている。一貫して、「いかに顧客、すなわち、利用者によりよいサービスを提供するか」という姿勢に徹底しているかを示すものといえよう。

### (3) スペシャル・コレクションズの役割と研究支援について

学内向け利用者サービスとは異なるが、バージニア大学図書館の貴重書(スペシャル・コレクションズ)が、大学と大学図書館に果たす役割について、また、貴重書が研究支援にどのように関わるかについて説明する。

日本にも、貴重書を展示、あるいは、インターネットで公開している大学がある。私の仕事に関係するところでは、京都大学が「電子図書館」として所蔵する貴重書を画像や電子テキストとして一般に公開している。貴重書をインターネットで公開することの意味は何か。それは、電気とブラウザがあ

るところ、世界中のどこにでも、その大学図書館が所蔵する貴重な書物を研究や調査の対象として提供するということであり、ひいては、そうした貴重書を所蔵する大学と図書館の知名度をあげるとともに、その大学にしかない「特色」を出すことになる。バージニア大学は、ハーバード大学やスタンフォード大学ほど日本での知名度はない。しかし、アメリカ合衆国第3代大統領であり、『アメリカ独立宣言』の起草者であるトマス・ジェファソンが大学の創始者であることから、彼にちなむ貴重書が数多く保管されている。こうした「他の大学にないもの」を積極的に学外に誇示することで、「バージニア大学図書館」の「味」を出すことになり、優秀なジェファソン研究者を図書館に惹き付けることにつながると思われる。アメリカの図書館は、こうした個性の発揮にも気を配っているといえるであろう。研究支援と図書館の個性作りが結びついた例といえる。

(いわぶち さちこ)

# 和光大学附属梅根記念図書館の現状

沢里冬子 和光大学附属梅根記念図書館事務長

たった今、岩淵先生から研究大学であるバージニア州立大学図書館のさまざまな優れた活動についてお話を伺うことができ、とても刺激を受けています。そのすぐ後で和光大学図書館の研究支援の現状についてお話するわけですが、これからお話することは、研究支援について改めて真剣に考え始めた図書館の、初めの一步としてお聞きいただければと思います。

和光大学の図書館はこれまで、どちらかという教育・学習をサポートするという視点から、主に学生に対するサービスの充実に力を注いできました。学部学科構成やカリキュラムに対応した資料の収集、貸出サービス、それから利用ガイダンスの充実などを中心に進めてきました。

今回のシンポジウムの「大学図書館の研究支援機能の充実」というテーマに即して考えてみますと、図書館として研究支援の役割を果たしているかどうかというふうに問われれば、まだまだ、さらにまだと言わざるを得ないと感じています。もちろん教員に対する基本的サービスやレファレンスサービスの充実に少しずつ努力はしてきていますが、研究にはこの図書館は役立たないというご意見があるのも、和光大学の中では一部事実というところもあります。一方で、現在の図書館サービスについてどんなことができるのかが知られていないこともあって、図書館から積極的に情報発信を行い、利用を掘り起こすということも必要だと感じています。

そんな中で和光大学の図書館で研究支援の1つとして進めてきたのがILLサービスです。雑誌の新規タイトルが増やせない、紀要類の保存タイトル数も制限せざるを得ないなどの環境の中で、教員の資料要求にこたえるために、2004年度から文献複写料金の無料化を実施しています。有料であった2003年度と比較して、2004年度は文献複写の利用件数が2.3倍になり、あわせて相互貸借の利用件数も3.5倍となってきました。

図書館では昨年来、教員サービスの充実に課題にして取り組みを進めてきていますが、その取り組みを進めるにあたって、専任教員を対象として、ごく簡単なものですが利用に関するアンケートを実施しました。

その回答の中でも一番評価されたのは文献複写料金の無料化でした。しか

し、一方で評価して下さる面と、雑誌記事・論文検索等のデータベースが限られているため、せっかくこういうサービスがあっても十分活用できないというような声も出されています。

また、研究書、洋書が少ない、データベースの導入を積極的に検討してほしいという意見も寄せられています。

もう1つ、改めて考えたのは、今日の企画にもあらわれているように、研究所の研究活動との連携ということです。今までも図書館では共同研究グループの図書資料の購入などを担当してきましたけれども、それはどちらかといえば受け身の対応で、研究支援というような視点は弱かったと思っています。

私がこのことを考えるきっかけになったのは、雑誌『太陽』のCD-ROMの対応です。ある研究グループで『太陽』の総目次CD-ROMを使って調査をして、資料を収集するという活動をされていました。『太陽』のCD-ROMのフルセットは250万円もするような高価な資料ですから、図書館でもそう簡単に購入できるというものでもありませんし、また、図書館として購入するとかしないとかだけをそのときに考えたということではありません。このことを通して考えさせられたのは、研究支援を担うべき図書館が研究所の活動や研究について十分な情報を把握できていないのではないか、こういうところでこそ何かできることがあるのではないかとということです。

そんなことを考えていた矢先の今年の7月9日に、研究所主催で公開シンポジウム「大学における研究活動は、いま」が開催されて、そこに参加しました。そこで研究所の歴史や考え方、これからの方向性などを知ることができて、図書館として研究支援の役割を果たすためには研究所との連携が必要だと改めて考えるようになりました。このことが、今日のシンポジウムにもつながっているのではないかとこのように感じています。

さらにもう1つ、検討を始めたのが、岩淵先生のお話の中にも出てきました、データベースや電子ジャーナルの導入です。現在提供できているものは主に日本の雑誌記事や論文検索、新聞記事の全文検索など、そういったような少数のものですが、数年前からぼつぼつと先生方からは海外のデータベースや電子ジャーナルの導入の要望が出されてきています。しかし、図書館予算の範囲内での実現というのはなかなか難しい状況にあります。唯一提供しているのが、外国雑誌タイトルの新規受入れが実現できなかった数年前に、ILLサービスを活用してそれに応えようということもあって、First Searchをブロックで購入して利用するしくみを導入しています。

さらにその後も、年々データベース導入の要望は大きくなってきていますし、他大学の導入状況等の調査をしてみても、現在の和光大学の状況というのは研究支援というにはほど遠いと言わざるを得ないと考えています。

研究支援の充実のために図書館が果たすべき役割は大きいと考えていますが、しかし、図書館という範囲の中だけでなく、大学として研究支援、研究環境の充実を考えるということが必要不可欠なのではないかとも思っています。

現在、大学図書館では、研究支援の機能はどうあるべきかといった明確な理念とか方策を持ち得ていませんが、今日の機会もそうですが、いろいろな機会を活用して学びながら、今できるところから1つずつ積み重ねていって、今日のテーマである研究支援の充実に向けて努力をしていきたいと考えています。

このシンポジウムを機会に、研究所、図書館、そして、今年度、データベースの提供を情報センターも始めていますが、その情報センターもあわせて連携することによって、さらに研究環境の充実を図ることができればと思いますし、先生方や院生、学生の方々も含めて、皆さんから研究支援についてのご意見やご要望をいただければと思っています。

さらにもう1つ、忘れてはならないことは、研究支援のできる図書館員としての力量を高めること、この点を図書館としても進めていかなければいけません。そのためにも、アンケートなどの方法で利用者の方々からの要望や要求をきちんと把握するというのも必要ですし、そういった図書館に対する要求、それから、レファレンスにしても、こんなことは図書館にはできないだろうということではなく、いろいろ出していただく。現在でも先生方から難しいレファレンスが来ると、みんなで知恵を出し合って、かなり時間をかけて、ああでもないこうでもないと言いながら解決の方法を見つけていくというようなこともしていますが、そういった要望をたくさんいただくことによってさらに育っていききたいし、育てていただきたいというふうに思っています。

最後に、これはちょっと宣伝のようなことになりますが、図書館では、昨年、津野館長から、大学での図書館の存在価値を高めて、ひいてはこの図書館を社会的に評価される図書館にしようという提起を受けて、今までにないさまざまな活動を始めています。

ただ、私たちは図書館の中で自主的にいろいろなことをするということには慣れているのですが、外に向けてなにかをするということがなかなか難し

くて、うまくいかないことも多いのです。どちらかという図書館の中ばかりで一生懸命努力していたのですが、昨年は、2回、図書館主催の講演会を実施し、それから、先生方のご協力を得て、『本を読もう』の第1集、第2集の発行などを実施することができました<sup>(1)</sup>。

今年も引き続いてこのシンポジウムの取り組みをし、また研究支援の一環としての学内資料の収集や、本当に役に立つパンフレットの発行などを計画しています。私たちも図書館から1歩2歩と踏み出して、さまざまな視点から図書館を考え直して、本当に存在価値のある、利用価値のある図書館に向けて進んでいきたいと考えています。

まとまらない話になってしまいましたけれども、お聞きいただきありがとうございました。

( さわさと ふゆこ )

(1) 和光大学の専任教員に、学生にぜひ読んでほしい本を3冊ずつ選んでもらい、各本に対する推薦理由の解説をまとめた冊子。

# 図書館利用者としての研究者の立場から

**長尾洋子** 所員・和光大学表現学部専任講師

私の専門は地理学ですが、地理学といってもあまりイメージがわからない方もいらっしゃるかもしれません。私に関心を抱いているのは、近代以降、現代社会における文化、社会について、地域社会のレベルから明らかにしていこうというような研究です。また、歴史学と対比させてみるとちょっとわかりやすいと思うのですが、歴史学は世界や人間というのを時間軸から見ていくのに対して、地理学では、世界や人間というのを空間という側面から見ていこうという方向性を持っています。ちょっと哲学的に言えば、人間の営みや経験、それから世界の成り立ちは、場所だとか縄張りだとか境界、土地といった空間的な観念とどのように結び付いているのかという、そういう面から研究をしております。

これまでの私の大学図書館経験というのを少しお話ししまして、それから、研究者にとってよい図書館とはなにか、基本レベルと、それから、「望むべくは……」という、二段構えでお話をしたいと思います。それから、もし時間が許せば、これまで利用した図書館の特色に絡めて、助かったなと思ったようなサービスの実例を紹介したいと思います。

私のこれまでの大学図書館遍歴ということですが、実際にはその他の図書館、国公立の図書館をはじめ、専門図書館等、あるいはアーカイブを利用していますので、研究者にとっては大学図書館というのは幾つもある選択肢のうちの1つということになります。

私が経験したのはお茶の水女子大学の図書館、それから、ロンドン大学の図書館です。ロンドン大学は幾つものカレッジだとか研究所等が連合体になっている、そういう組織です。ですから図書館もいろいろあり、数が多いんですけども、大学院生として所属していたのが SOAS(東洋アフリカ学院)というところで、日本で言うと外国語大学、東京外大などのようなイメージのカレッジです。各国語だとか、それから言語学、地域研究などが非常に有名で、世界でも有数の、こういった領域では非常に有名なカレッジなんです。SOASの各国語のコレクションというのは、イギリスのナショナル・コレクションとしてカウントされているというが、そういう扱いで国も整備に力を

入れているということを図書館案内のときに聞きました。

それから、ロンドン大学傘下にあるカレッジの図書館が使えますので、SOASの学生、院生であっても、例えば政治経済国際関係論などで有名なLSE<sup>(1)</sup>の図書館、それから、ロンドン大学の中央図書館にあたるセネットハウス・ライブラリーという図書館、それから、インステチュート・オブ・COMMONWEALTHS・スタディーズという英連邦の資料がいろいろと集まった研究所のアーカイブ、こちらのほうも利用した経験がございます。これら4つはすべてロンドン大学の傘下にあるものです。

つぎに、一橋大学の図書館ですが、助手として勤務していたころにメインの図書館と経済研究所附属の図書館を利用しました。それから和光大学の図書館、あと、今年の春、ちょっと資料調査に出かけたコーネル大学のオンライン・ライブラリーという図書館を利用しました。コーネル大学は、先ほどの岩淵先生の講演の中では、リサーチ・ユニバーシティというというステータスをかなり初期の段階から得ていた、リサーチがメインの大学での調査経験だったんだと、今お聞きして思いました。

ですから、幾つもの図書館を利用した経験はあるわけですが、今、改めて研究者にとってよい図書館とはどんな図書館だろうと考えてみますと、基本レベルで2つあると思います。

1つは、「探す」手段が充実していること。これは本を探すというふつうの意味とは、重なりつつちょっと違う意味です。研究者というのは常に何かクリエティブなことをしたい、まだ誰も手を付けていないところがあれば、その場所を探し出して自分がやってみたいというようなことで動いているわけですから、まだ固まっていないアイデアだとか、断片的な情報とか着想というのが頭の中にいろいろあるわけです。それをつなげていく段階というのが、検索サービスを利用している段階だとか、あるいはレファレンス・サービスに行って、こんなはないでしょうかとか、いろいろ相談をしていたりする段階なんです。まだ固まっていないアイデアだとか断片的な情報をつなげていく、こういうときに欲しいものを探す手段が充実しているとすごく助かるということなんです。

だから、欲しい文献が決まっていて、それを探すという意味ではないんです。その違いに注意をしていただきたいのです。その文献が既に存在しているとか、そんなことを感知する前の話なんです。どの文献が欲しいか、必要

(1) London School of Economics

なのかというのを探すときに、そのためのツールがあるとすごくいいということで、1つの条件はデータベースが充実しているということだと思います。こちらはとにかくいろいろな検索語を試してみるわけですし、そこに引っかかってくるものが多かったり、あるいは多様なもの、意外なものが引っかかると、しめしめと思うのです。

実際的なことになりましたが、物理的に端末数がちゃんと確保されているとか、オンラインでデータベースにアクセスできる、これは図書館内でアクセスできるのは当然のこととして、研究室からアクセスできるとか、あるいは自宅からアクセスできるとか、いろいろレベルがあると思いますが、少なくとも研究室からアクセスしたい。和光大学の場合は研究室からアクセスできるので、その点は非常に助かっています。たぶん自宅からはできなくて、一部できるものもあるかもしれませんが、契約の種類によってはできないなど、いろいろ制限があるのではないのでしょうか。

それから、レファレンス・サービスの充実ですが、これは先ほどの専門性という話にもかかわってきます。どのようなコレクションや分類というのが、そのトピック、私たちの「妄想」に引っかかってくるか、そういう知識の提供ですね。もしかしてこういうコレクションの中に有用な本や資料があるかもしれないとか、知識も必要でしょうし、そういう推測能力も必要だと思います。

それから、ちょっと期待し過ぎかもしれませんが、文献調査の代行ですね。これは自分でも期待したことはこれまであまりないのですが、たまたま結果的に司書の方が、私が自分でやるよりも高度で、時間的にも速く、文献調査の代行にあたる作業をしてくださった経験がありまして、非常に助かりました。

2つ目には、欲しいものがわかったときに、それがすぐに閲覧できたり入手できたりすることです。これはその図書館にどれだけ蔵書があるのかということにも影響を受けるでしょう。それから、開館時間ですね。夜9時にやっとどの文献に当たったらいかががわかった、でも、そのときには図書館はちょうど閉まる時間だというようなことがあります。こんなときには夜遅くまで開いていたほうがいいなというふうになるわけです。大学でもいろいろ事情があるでしょうから、その辺は（何時まで、という具体的な要望はとくにありませんが、できるだけ）長ければいいなと思うくらいです。その他、欲しいものがすぐ手に入るかどうかというのは、利用者数の多寡にもよるでしょう。

蔵書の少ない図書館では、相互貸借とか文献複写サービスというのが非常に重要になってくると思います。これも欲しいものがすぐに閲覧できるという迅速性が利用者にとっては重要です。日本の大学は確実性というのはかなり高いと思うんですけども、迅速性に関しては改善の余地が多くあると思います。先ほどオンラインで文献複写のサービスが申し込めるということがありましたけれども、そういったことで迅速化が図れるといいなと思います。

また、蔵書数の少ない図書館では、他大学や他の研究機関の適切なサイトをリスト化してくれて、こちらデータベースとして使用できると非常にありがたいと思います。1つのハブのような機能といいますか、それも重要ではないかと思います。一橋大学の図書館では、一部、購入希望などもオンラインで受け付けるようになっていたと思います。

ですから、基本レベルとしては、探す手段が充実している、そして、欲しいものがすぐ閲覧・入手できるというのがよい図書館の条件だと思います。さらに、望むべくはというレベルでは、専門性を期待しています。研究が盛んな大学は図書館も専門性が高い。図書館は大学に所属する研究者のために専門性を高めるといっても、お互いの専門性の高さというのは相乗効果を生むというか、相互補完的なものがあるのではないかと考えています。ユーザーとしての研究者としては、図書館、あるいは図書館の皆さんも専門性が高いと非常にインスピレーションを受けやすいし、情動的にも質の高いものが多く得られるということで期待をしています。

ところで、専門性というものには2種類あるのではないかと思います。私は図書館学をやったわけではないので、図書館学的に言った司書の専門性ということではなくて、研究者としては司書の方々にこういう専門性があつたらとてもいいんじゃないかというような文脈で話をしています。

1つは、司書としての専門性です。レファレンスをしっかりできる方、信頼のおける方がいいということです。それから、探し方を教えてくれる、何かヒントというか、それを折にふれて指南してくれる存在というのは非常にありがたいし、自分でまたそこから広げられるということがあります。時々、研究者自身のほうが詳しくなったりすることもあるんですけど、そうすると何となく、司書なのになと思って、小さな失望を味わうときもあります。けれども、こういうときこそ研究者自身が、私、こういうのも使ったことがあるんですけどか、こういうコレクションがこの大学にあると聞いているんですが、という形でお互いに情報交換ができれば、お互いの専門性とか知識を高めることができると思います。これは自戒も込めてそう思っています。

それから、司書としての専門性ということでは、データベースの増強だとか、データベース使用のためのツールの開発ということは、かなり工夫が期待されるのではないかと思います。これは司書の専門性として非常に高く評価したいし、期待したい部分です。これは岩淵先生の講演の中では積極的な支援という部分に対応する点かだと思います。また、沢里事務長のお話だと、サービス需要を掘り起こす、あるいは First Search の導入ということがありましたけれども、そういう部分と対応していると思います。

それから、もう1つの専門性ですけれども、それは特定の学術領域にかかわる専門性です。先ほど岩淵先生のお話の中に、米国の図書館司書が図書館学のほかにどういう学位を持っているか、専門教育を受けたかという話が出てきました。そういう部分ですね。これは専門領域ごとに結構違うのではないかと思いますので、ちょっと例をあげてお話しします。

例えば和光大学では朝鮮資料だとか、あるいは大高文庫と呼ばれる中国文学や中国近現代史を特別に集めたコレクションがあります。私自身はこういった資料を使って研究を行うことはありませんが、専門の担当者をこういったコレクションに配置しているかというふうなことに関心があります。そのときの専門性は、その言語が読み書きできる、それから、韓国、朝鮮、あるいは中国における出版事情に詳しい、それから、コレクションの資料的価値を客観的に説明できる、といったことを指します。客観的に説明できるということの意味は、例えば他大学の類似のコレクションとの比較においてどうなのかとか、国内、国際的な位置としてはどういうものなのか、数において、質において資料の特徴が説明できるということです。

でも、こういったものは実際には図書館員の自助努力というところでは限界があります。もちろんそういった専門教育を受けているということがあっても、日々、研究というのは進みますし、出版事情なんかも変わっていきますから、学内外の研究者との交流、研究、そういった活動を通じて実現されていくのかなというふうに思います。ちなみに、SOAS にはこの種の専門職員が複数言語にわたって配属されていて、最近、日本語部門が縮小されて物議をかもしただけです。

それから、もう少し視野を広げてみますと、コレクション単位ということではなくて、例えば和光大学には表現学部、人間関係学部、経済経営学部の3学部があるので、学問分野としては人文、社会科学、それから経済学の方をカバーしているということになります。そうすると、人文、社会科学、経済学における主要な定期刊行物だとか、出版社、あるいは主要な参考図書

類について、和文、欧文とも通じているかどうかとか、研究者側から見ればそういうことを指して専門性があるないというのを判断します。

ちょっとしゃべり過ぎてしまったので、あとを割愛しますが、まとめて言えば大学図書館として基本レベルの条件をみたすと同時に専門性のあくなき向上というものも期待したいと思います。とりあえずこれで終わりたいと思います。

(ながお ようこ)

# 日本の大学図書館の研究支援機能

**津野海太郎** 所員・表現学部教授・和光大学附属梅根記念図書館長

私は和光大学に来て6年になりますが、その間、学外で『本とコンピューター』という雑誌を出しておりました。図書館や出版界の電子化がようやく軌道に乗りはじめたくらいの時期に始めて、この7月に終刊した雑誌です。

その間、e-テキスト問題といいますが、例えば日本文学・日本文化にかかわる諸資料のデジタル化がどのように進行しているかといったことを継続的に見てきたんですが、バージニア大学の日本語資料のデジタル化はすごいですよ。始まったのも早いし、点数も多く、もちろん縦組みで読める。日本国内での取り組みが遅れたぶん、たいへんめだっていたという印象がたつよくあります。

たとえば戦前のプロレタリア文学関係のテキストとか、戦後でも、宮本百合子が新日本文学会という左派の文学運動を開始するにあたって書いた「歌声よ起これ」という文章とか、日本ではもう印刷物としてもなかなか読めないような資料までが、きちんとe-テキスト化されているんですね。ちょっとびっくりしました。そうした特色のある試みを中心になって続けてこられた岩淵さんと、今日ここでご一緒できたのはたいへん嬉しい。そのことをまず申し上げておきたいと思います。

実は私は、きょう岩淵さんのお話をお聞きして、バージニア大学の創始者であるトーマス・ジェファーソンが、この新しい大学を設計するさいに「教会ではなく図書館を中心とした大学」という構想を最初からもっていたということを初めて知りました。ジェファーソンが大変な本好きだったということ、アメリカの公共図書館史とも深い関係を持っているということは一応承知していましたが、彼がバージニア大学をそういう空間として構想し、それが現在のe-テキスト集成にまでつながってきたなどということは想像もしていなかったので、たいへん感動したのです。

感動した理由は簡単です。もしジェファーソンが現にそうしたように、ひとつの大学を図書館を中心に構想したとすれば、そこでの図書館の位置は非常に高いものになりますね。図書館というものが大学という社会を質的に維持してゆくために不可欠の仕組みとして認識され、したがって図書館長の位

置も学長と匹敵するぐらい高いものになる。当然、そういうことになると思うんですけども、ひるがえって和光大学のことを考えると、ここでの図書館長の地位などまことに微々たるものでしてね。ほかの先生方が働くのと同じように働き、余りの時間を使って図書館の業務をやるということですから、仮に何か大きなことを構想したとしても、それを実現するための時間的、経済的な余裕が全くない。残念ながら、和光大学にかぎらず日本の小さな大学の図書館はおおむね、そういう場所になってしまっているのです。

大学という社会に限らず、どんな社会でも、その構成員が自発的に自分に知識を増やし、考える力を高めていってくれないと、その社会、コミュニティーそのものが運営できなくなってしまう。そうならないために、その社会の構成員 地域社会なら住民、大学社会なら教員や学生や職員が、自分が抱えている問題について十分に考えることができるだけの基本的な資料、考えるためのツールを、いつでも自由に手に入れることのできる仕組みが必要になる。それが実は図書館なんですね。大学の場合、カリキュラムに従って行われる講義では、教える者と学ぶ者という関係がまずあって、それに基づく強制のシステムがある。強制なしの教育はありませんから、それはそれで必要な仕組みなのですが、それだけでは足りない。授業を中心にする大学とは別に、学生にせよ研究者にせよ、自分たちがテーマを発見して資料を集めたり調べたり考えたりしてゆく、そうした自発性のみにもとずく「もう一つの大学」とでもいうべきものが、どうしても必要です。そうでないと大学が大学でなくなってしまう。その「もう一つの大学」の中心が図書館である。おそらくジェファソンはそのように考えていたんじゃないでしょうか。

さっき図書館長の地位が低いという話をしましたけれども、もちろん図書館員の地位も非常に低い。和光大学も含めて、たぶん大学の先生たちの中には、司書とは敬意を払うに値する専門職なのだという認識など、ほとんどないんじゃないでしょうか。ただの道具、図書館の役人というふうに見てしまっている。そうではない、もっと相互的な敬意に基づいた関係がつけられて、ひいては大学に図書館が果たすべき役割といったものがはっきりと定義されてこない、なかなかエネルギーが出てこないという気がします。

研究支援についても同じです。データベースや電子ジャーナルを充実させて、研究のお手伝いをするのはもちろん重要だし、基本的なことには違いありませんが、それだけではわびしい。すさまじい技術革新の速度にただ追いつまられて、学術出版社のビジネスに引き回される一方というのではつまらない。それぐらい冷めた気持ちで、しかし、もしそうだとしたらこういう手

があるんじゃないかということ、図書館員が研究者の方たちと一緒に一から考えていったほうが良いという気がします。

和光大学だけではなくて、この近辺には小さい大学がたくさんあります。1つの解決策としては、電子的なものであれ、紙のものであれ、地域性を生かした資料の共同保存ライブラリーといった仕組みをつくれなかと考えています。

また、地域の公共図書館とネットワークを組むことも考えられます。和光大学がある多摩地区というのは公共図書館運動では先進的な地域なんです。1960年代の末から70年代にかけて、ここから始まった市民図書館運動が日本の公共図書館サービスの骨格をつくりあげた。いま、この地区の図書館人たちのあいだでは、石原都政による強引な予算削減によって個々の図書館が廃棄せざるをえなくなった本を集めて共同保存図書館をつくらうという動きが始まっています。そうした動きも視野に入れながら、小さな大学図書館は、その小ささや地域性を活かして、大学の外の公立図書館などとも積極的にネットワークをつくっていったらどうか。大きい大学図書館はそれなりのモデルがあってやってきたわけですが、小さい大学図書館にはモデルがありません。そういうモデルを共同で開発してゆく。こういう仕方であれば小さい大学でもこれだけのことができるんだとか、eジャーナルは大学が用意するけど、マンガは公立図書館にお任せしますよとか、せっかくOPACの時代なんですから、なんとかうまく仕組みをつくっていけないものではないでしょうか。

バージニア大学のお話を聞いて、サービスの多彩さと質の高さにはあっけにとられました。日本の図書館というのは、大学図書館も公共図書館も、そういうサービスについて経験を洗い直し、組み立て直すという作業をまだやってないんですね。それが、さっき言ったような、図書館の社会的位置の低さということにつながってしまう。サービスという概念を、自分たちの経験に即して再定義し、再組織する作業をすすめて、何らかのモデルをつくる必要があるんじゃないか。お話を聞いてそう痛感した次第です。

(つの かいたろう)